

大牟田市立橋中学校

1 本校のESDの特徴

本校では、「ひと・こと・もの」について、自ら課題を見出し、体験活動等を通して主体的に問題解決できる能力を育てることをねらいとし、総合的な学習の時間を中心に、全教科、領域において横断的・総合的にESDに取り組んでいる。主に防災・減災や福祉、キャリア教育（生き方、働くこと、進路）などについて学習している。

体験学習を6月と1月に3日間ずつ設定しており、充実した体験を通したESD活動ができるように努めている。

2 ユネスコスクールとしての活動・全体計画

学年	主な内容
1年	【地域における防災・減災に関わる学習】 「誰もが安心して暮らせる社会について考える。」 ・ゲストティーチャーによる講話 ・学校周辺のフィールドワーク ・防災グッズについての調査
2年	【働くことの意義についての学習】 「人はなぜ働くのかをテーマに、働く上で大切な心構えや意義について考える。」 ・働くことについてのインタビュー（家族、身近な人） ・地域で様々な職業に就いてある方による講話 ・大牟田の特産品を使った新しい商品企画書の作成、プレゼン
3年	【将来の生き方に関わる学習】 「自分の生き方を考える。」 ・高校の先生による将来の生き方についての講話 ・高校の学科ごとによる授業体験 ・自分の進路についてのまとめ

3 特徴的な活動事例の紹介

(1) 第1学年 「地域における防災・減災に関わる学習」

- 第1学年では、市の防災担当の方をゲストティーチャーとして招き、防災・減災学習に取り組んだ。令和2年7月、令和3年8月の豪雨における市内・校区内の状況や防災活動の事例をもとに、普段の心構えや避難の仕方等について学び、防災・減災についての意識を高めた。その後、防災担当の方の指導のもと、グループに分かれてフィールドワークを実施し、学校周辺の危険箇所の確認を行った。防災グッズについても、実物を手にしながら調査を行い、防災グッズの種類や活用方法等を学んだ。



学校周辺の危険箇所調べ

(2) 第2学年 「働くことの意義についての学習」

- 第2学年では、「人はなぜ働くのか」をテーマに、働くことに対して自分なりの考えをもった後、

家族や身近な人にインタビューを行い、働く目的や働く意義について理解を深めた。その後、商工会議所や一般社団法人の協力のもと、講話と体験学習を実施した。

講話では、地域で働く様々な職業の方から話を聞き、利益を求める以外にも地域貢献や担い手の継承など働く意味がいくつもあることについて気付くことができた。

体験学習では、大牟田の特産品を使った新しいスイーツの商品企画書の作成を学級の班ごとに行った。企画商品の発表会では、地元の菓子職人の方などに審査員となっていたいただき、自分たちの企画したスイーツについて班ごとにプレゼンテーションを行った。グランプリに選ばれた「石炭シュー（商品名「橘クロえもん」）は、地元の菓子店によって実際に商品化され、11月に大型商業施設のイベントにおいて生徒たちによって販売された。好評だったため、1月には再度商品化され、大牟田駅前広場で販売を行った。



生徒が開発した商品の販売

生徒たちは商品の準備や店頭での販売等での体験を通して、仕入れや価格設定等商品の販売に関わることを学んだ。またそれだけではなく、職人・企業の方々の商品開発にかける思いや熱意についても実感し、自己の生き方を考えるきっかけとなった。

(3) 第3学年 「将来の生き方についての学習」

○ 第3学年では、「自分の生き方を考える」をテーマに、キャリア教育の一環として高校の授業体験や高校の先生による講話を実施した。

授業体験では、近隣の高校から先生と生徒に来校していただき、様々な学科の体験授業を受けた。

講話では、市内の高校の先生を講師として招き、自分の適性や進路、職業選択の心構え等について話を聞いた。



高校生活について学ぶ生徒

生徒たちは、授業体験や講話を通して、自分の将来の在り方について様々な視点からじっくり考えることができた。

(4) コロナ禍を踏まえた取組

○ 昨年度から新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、例年実施していた職場体験学習や福祉施設訪問、京都・奈良の世界遺産学習など、校外での活動に制限がかかり、訪問学習や地域の方との交流が実施できなくなった。そのため、講師を学校に招いての講話や小グループでの体験活動、オンラインでの交流等、工夫をしながら取組を行った。

従来行っていた活動は制限されたが、2年生のスイーツの商品開発や3年生の校内での体験学習など、校外の方たちの支援を受けながら新たな取り組みを行うことができた。

4 本年度の成果と課題

○成果

・コロナ禍により高齢者や地域の方、職場体験先等との交流が制限されたため、市役所や商工会議所、一般社団法人等、交流先を新たに開発した。その結果、今までにない新しい活動に取り組むことができ、生徒の達成感や成就感につながった。

○課題

・一つ一つの活動を単発の学習とするのではなく、教科、行事などとの横断的な学習となるようにさらなるカリキュラム・マネジメントの工夫が必要である。